広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第155集

出羽遺跡

1997

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

出　羽　遺　跡

1997

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

例　言

1．本書は，県営ほ場整備事業（千代田東部地区）に係る出羽遺跡（山県郡千代田町南方 229，230）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，広島県教育委員会と広島県可部農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．発掘調査は，大島　裕・中村光則・岩井重道・梅本健治が担当し，遺構の実測及び写真撮影を行った。

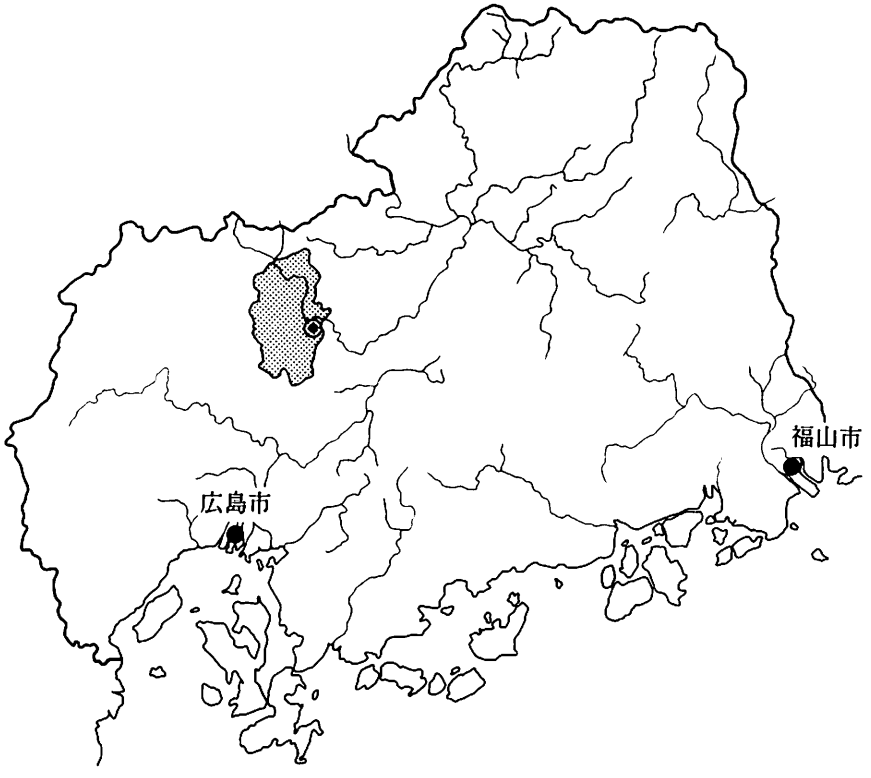
4．出土遺物の実測は上記の者が行い，遺物の写真撮影及び本書の執筆・編集は大島が行った。

5．遺構の表示記号は，ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡，ＳＫ：土壙，Ｐ：ピットである。

6．図版と挿図の遺物番号は一致する。

7．第１図は，建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（八重・佐々井）を使用した。

8．本文中に用いた方位は，第１・２図が真北で，ほかはすべて磁北である。



千代田町位置図（◎は遺跡の位置を示す）

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 6
Ⅳ　遺構と遺物 …… 7
Ⅴ　まとめ …… 15

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図　（１：25,000） …… 3
第２図　周辺地形図　（１：1,500） …… 5
第３図　遺構配置図　（１：300） …… 6
第４図　ＳＢ１実測図　（１：60） …… 7
第５図　ＳＢ２実測図　（１：60） …… 8
第６図　ＳＢ１・ＳＢ２出土遺物実測図　（１：３） …… 9
第７図　ＳＢ３実測図　（１：60） …… 11
第８図　ＳＫ１実測図　（１：40） …… 12
第９図　調査区内出土遺物実測図Ⅰ　（１：３） …… 13
第10図　調査区内出土遺物実測図Ⅱ　（１：２） …… 14

図版目次

図版１ａ．遠景（北から）
ｂ．調査前近景（南から）
ｃ．調査後全景（南から）
図版２ａ．調査後全景（北から）
ｂ．ＳＢ１調査風景（北東から）
ｃ．同上完掘状況（西から）
図版３ａ．ＳＢ１土器出土状況（北から）
ｂ．同上（南東から）
ｃ．ＳＢ１土層断面（西から）
図版４ａ．ＳＢ２完掘状況（北西から）
ｂ．同上土器出土状況（北から）
ｃ．同上土層断面（南から）
図版５ａ．ＳＢ３完掘状況（西から）
ｂ．ＳＫ１完掘状況（北西から）
ｃ．同上土層断面（東から）
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２
図版８　出土遺物３

Ⅰ　はじめに

出羽遺跡の発掘調査は，県営ほ場整備事業（千代田東部地区）に係るものである。千代田町では，近年工業立地の進展に伴う農業の兼業化が進行しており，これに伴って生産性の高い農業経営を推進する必要に迫られている。本事業はその一環として実施され，農地を整備改善し，合理的な水管理や農地の集団化による優良農用地を確保することによって農家の育成を図ろうとするものである。

広島県可部農林事務所（以下「可部農林」という。）は，1987（昭和62）年６月広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に事業予定地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて照会した。これをうけて県教委は現地踏査を行い，1989（平成元）年３月試掘調査が必要な地点９か所が存在する旨，可部農林に回答した。1995年10月千代田町教育委員会（以下「町教委」という。）が試掘調査を実施し，出羽遺跡（1,650㎡）を確認した。

同遺跡の取り扱いについて，県教委と可部農林で協議を重ねた結果，設計変更等による現状保存が困難な箇所（430㎡）については事前に発掘調査が必要という結論に至った。発掘調査に伴う経費は，文化庁長官と農林省構造改善局との覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」５条に基づき，事業者負担分（80％）を可部農林が，農家負担分（20％）を県教委が負担することになり，1996年３月可部農林及び県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査を依頼した。同年４月にセンターは可部農林及び県教委との間に委託契約を結び，４月８日から５月10日までの１か月間，発掘調査を実施した。また，６月22日には町教委と共催で遺跡報告会を開催し，約50名の参加者があった。

本報告書は，以上の経過をもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては，広島県教育委員会の御指導を得るとともに，広島県可部農林事務所，千代田町教育委員会，千代田町農地整備課，財団法人広島県農業開発公社，地権者及び地元の方々から多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

Ⅱ　位置と環境

出羽遺跡が所在する山県郡千代田町は広島県北西部に位置し，北は大朝町，東は美土里・八千代の両町，南は広島市安佐北区，西は豊平町に接する中国山地の町である。総面積の約８割は山林で四方に標高600～800ｍの山々が連なっているが，町の中心部を流れる江の川（可愛川）とその支流によって形成された沖積地は比較的広く，穀倉地帯となっている。また，古来，山陰と山陽をつなぐ交通の要衝としても重要な位置を占めており，今日においても中国自動車道と浜田自動車道・広島自動車道を結ぶジャンクションやインターチェンジが設けられている。この立地条件を活かして，流通団地の建設が進むなど，中国山地の中核工業地域としての発展が期待されている。

本町においては約300か所の遺跡が確認されているが，以下，発掘調査された遺跡を中心に，本遺跡周辺の歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代については，歳ノ神遺跡群(1)で水晶製のナイフ形石器が，また，縄文時代においては，大朝町との町境付近の河原山遺跡(2)や本地丸山遺跡(3)で土器片や石鏃などが出土しているが，遺構については明確ではなくその様相は明らかでない。

弥生時代になると遺跡数も増加するが，前・中期の例は少なく，後期の遺跡が多い。集落跡としては，歳ノ神遺跡群，焼け遺跡(4)，京野遺跡(5)がある。焼け遺跡は弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけての集落跡で，竪穴住居跡７軒や集落を囲むと推定される溝が検出されている。京野遺跡は後期を中心とする大規模な集落跡であり，丘陵の北西斜面を中心に竪穴住居跡54軒，掘立柱建物跡27棟のほか，多くの段状遺構や土壙が検出されている。遺物は弥生土器片とともに銅鏡，ガラス製勾玉，鋳造鉄斧などが出土しており，本地域の弥生時代の様相を知る上で注目される。

墳墓群としては，前期の塚迫遺跡群(6)，後期から古墳時代初頭にかけての歳ノ神遺跡群，壬生西谷遺跡(7)，中出勝負峠第２・３号墓(8)がある。塚迫遺跡群からは木棺墓８基，土器棺墓６基が検出され，供献土器が出土している。歳ノ神遺跡群は山陰との関わりがある四隅突出型墳墓２基を含む多数の墳墓で構成される。壬生西谷遺跡は，箱式石棺を主とする34基の墳墓からなり，木棺墓から内行花文鏡，鉄鏃などが出土している。

古墳時代は，古墳の調査例が多く，集落跡は少ない。古墳については，竪穴式石室を内部主体とする古墳として金子第２号古墳(9)，塚迫第１・２号古墳(10)，古保利第44号古墳(11)などがある。金子第２号古墳からは鉄鏃，刀子，鉄斧など多量の鉄製品のほか，須恵器が出土しており，古保利第44号古墳からは挂甲，馬具，鉄鏃などが出土している。これらの古墳の築造年代は出土遺物から６世紀前半代とされる。

横穴式石室を内部主体とするものは，一般的に丘陵斜面に立地し群を構成する。調査された古墳には有岡谷第１号古墳(12)，石塚第１・２号古墳(13)などがある。有岡谷第１号古墳は玄室床面の一部に須恵器蓋杯を敷いている。また，石塚第２号古墳からは，鳥形の装飾須恵器が出土している。

A．出羽遺跡	1．氏神正田遺跡	2．古保利古墳群	3．壬生西谷遺跡
4．壬生城跡	5．塚迫遺跡群	6．金子古墳群	7．中出勝負峠墳墓群
8．大国古墳	9．蔵ノ神遺跡群	10．国藤古墳群	11．青木原遺跡
12．中原城跡	13．石塚古墳群	14．本郷城跡	15．正田横穴

第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

このほか，出羽遺跡の周辺では山陰地方の影響が考えられる横穴墓の正田横穴，本郷原横穴が存在している。

集落跡としては本郷遺跡[04]，青木原遺跡[05]などがあげられる。本郷遺跡からは前期の竪穴住居跡4軒，中期の竪穴住居跡1軒，土壙4基が，青木原遺跡からは，6世紀後半から7世紀初頭と考えられる方形の竪穴住居跡6軒が検出されている。

千代田町は古代山県郡に属し，壬生・山県・品治郷がそれぞれ現在の壬生・古保利・本地に比定されている。特に古保利には郡衙の存在が考えられ，当地域が古代山県郡の政治的な中心地の役割を果たしていたことが推察される。当時の郡内において勢力を有していたのが郡司の系譜に連なる凡(おおし)氏一族である。平安末期，凡氏一族は平氏一門に接近するため，所領を厳島神社に寄進した。このため，12世紀中葉には厳島社領である志道原荘，壬生荘，寺原荘などが山県郡内に成立している。

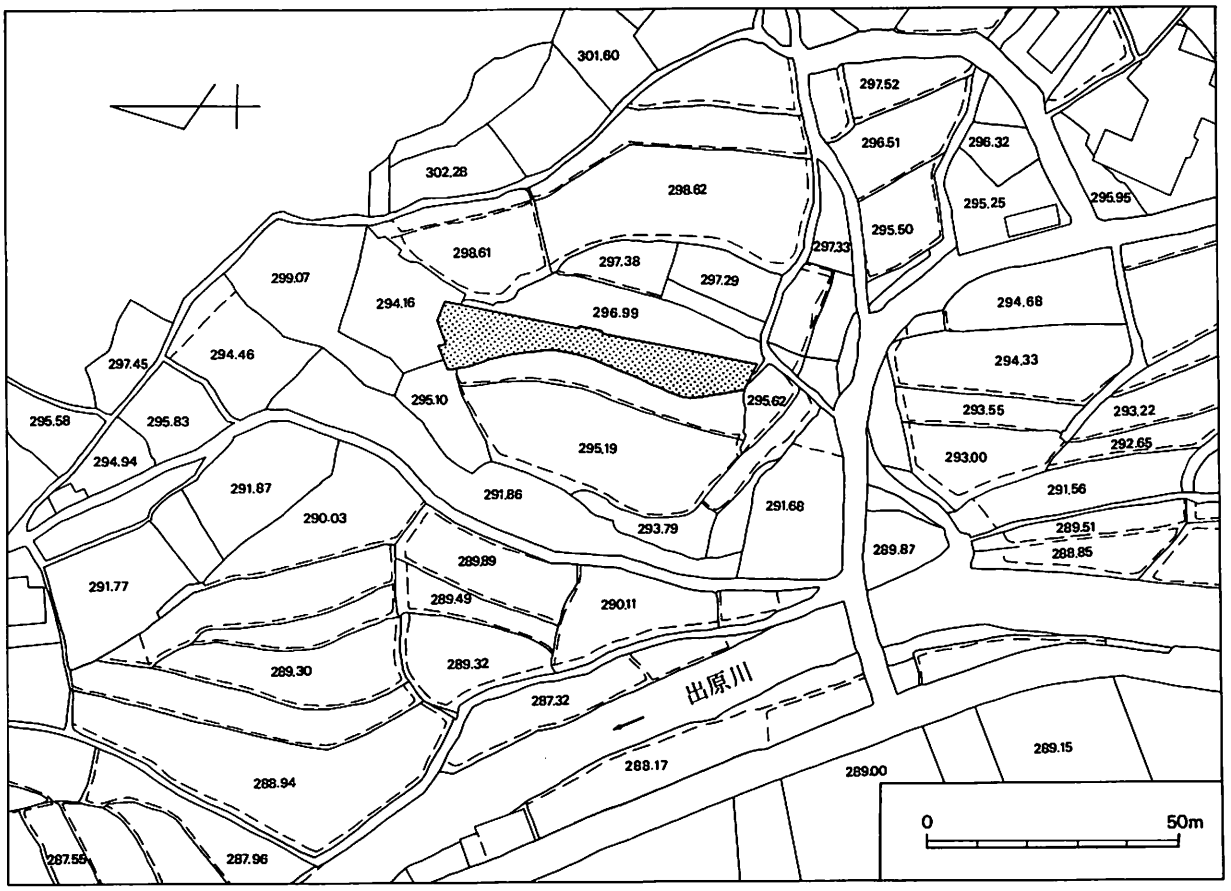
鎌倉時代になると厳島神主家藤原氏の本町内への勢力浸透が強まるが，南北朝の内乱を経て，その勢力は弱まっていった。室町時代には周防国大内氏の進出がみられ，本町域をめぐって在地勢力の毛利氏，吉川氏，武田氏や山陰から勢力拡大をねらう尼子氏らの諸勢力が抗争をくりかえした。この抗争の結果，毛利氏が台頭し，本町域はその一族の吉川氏の影響下におかれるようになる。

中世の遺跡では，城跡や寺院跡や古墓などが知られている。調査されたものとしては龍山(たつやま)城跡[16]，小奴可(おぬか)城跡[17]などがある。そのほか吉川氏の本拠である日山(ひのやま)城跡をはじめ，有田城跡や壬生城跡などの中世山城が多く存在し，本遺跡の東側丘陵先端部に立地する中原(なかばら)城跡は16世紀頃の南方氏の居城であったとされている。寺院跡としては，吉川氏の菩提寺である万徳院(まんとくいん)跡[18]の調査が行われ，建物跡のほか庭園跡や石垣が検出されている。

註

（1） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「歳ノ神遺跡群」『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』 1986年
（2） 小都隆 「山県郡大朝町河原山遺跡について」『芸備』第2集 芸備友の会 1974年
（3） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『本地丸山遺跡発掘調査報告書』 1996年
（4） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「焼け遺跡」『本郷遺跡 焼け遺跡』 1990年
（5） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが1994年度に発掘調査を実施した。
（6） 広島県教育委員会 「塚迫遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1982年
（7） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『壬生西谷遺跡』 1989年
（8） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「中出勝負峠墳墓群」『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』 1986年
（9） 広島県教育委員会 「金子古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1982年
(10) 註(6)に同じ
(11) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 「古保利第44号古墳」『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』 1976年
(12) 広島県教育委員会 『城が谷遺跡群発掘調査報告－石田工業工場用地造成にかかる－』 1973年
(13) 広島県教育委員会 『石塚古墳発掘調査概報』 1974年

(14)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　「本郷遺跡」『本郷遺跡　焼け遺跡』　1990年
(15)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『青木原遺跡』　1986年
(16)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　「龍山城跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅱ)　1993年
(17)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『小奴可城跡発掘調査報告書』　1988年
(18)　広島県教育委員会　『史跡吉川氏城館跡　万徳院跡－第1～3次発掘調査概要－』　1991～1993年



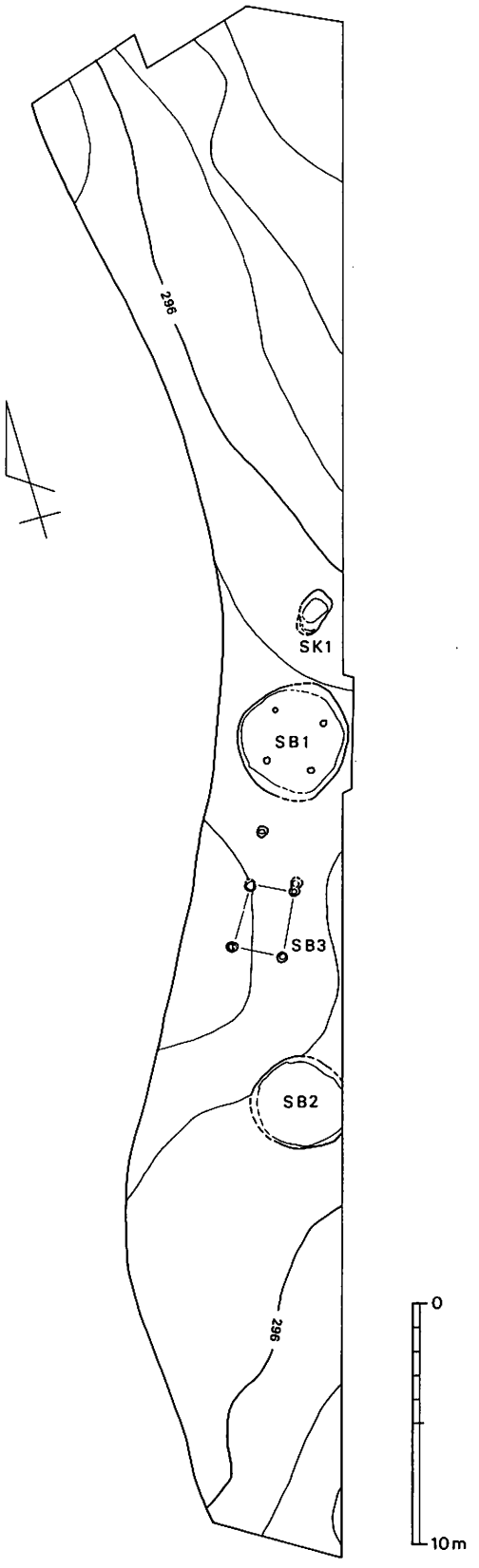
第2図　周辺地形図（1：1,500）　アミ目は調査区

Ⅲ　調査の概要

出羽遺跡は山県郡千代田町の南東部に位置し，北流して可愛川に注ぐ出原川右岸の河岸段丘上に立地する弥生時代後期の集落跡である（標高 296ｍ）。周辺は出原川沿いの狭小な水田地帯で，出原川河床面から遺跡までの比高は約10ｍである。

調査は南北に細長い調査区の数箇所にトレンチを入れて，土層確認をしたのち，重機により耕作土・床土を除去し，遺構の精査を行った。その結果，調査区のほぼ中央を東西に走る幅約30ｍ，深さ約1.5ｍの谷状地形を検出し，この谷状地形の埋積土最上層である黒褐色粘質土直下の黒色土層上面で遺構を検出した。なお，黒褐色粘質土層中には弥生時代後期をはじめとする多くの土器片が包含されており，谷頭部側に弥生時代の遺跡の存在が考えられる。

検出した遺構は，竪穴住居跡２軒（ＳＢ1・ＳＢ2），掘立柱建物跡１棟（ＳＢ３），土壙１基（ＳＫ１）で，弥生時代後期を中心とする土器片，磨石などの遺物が出土した。



第３図　遺構配置図（１：300）

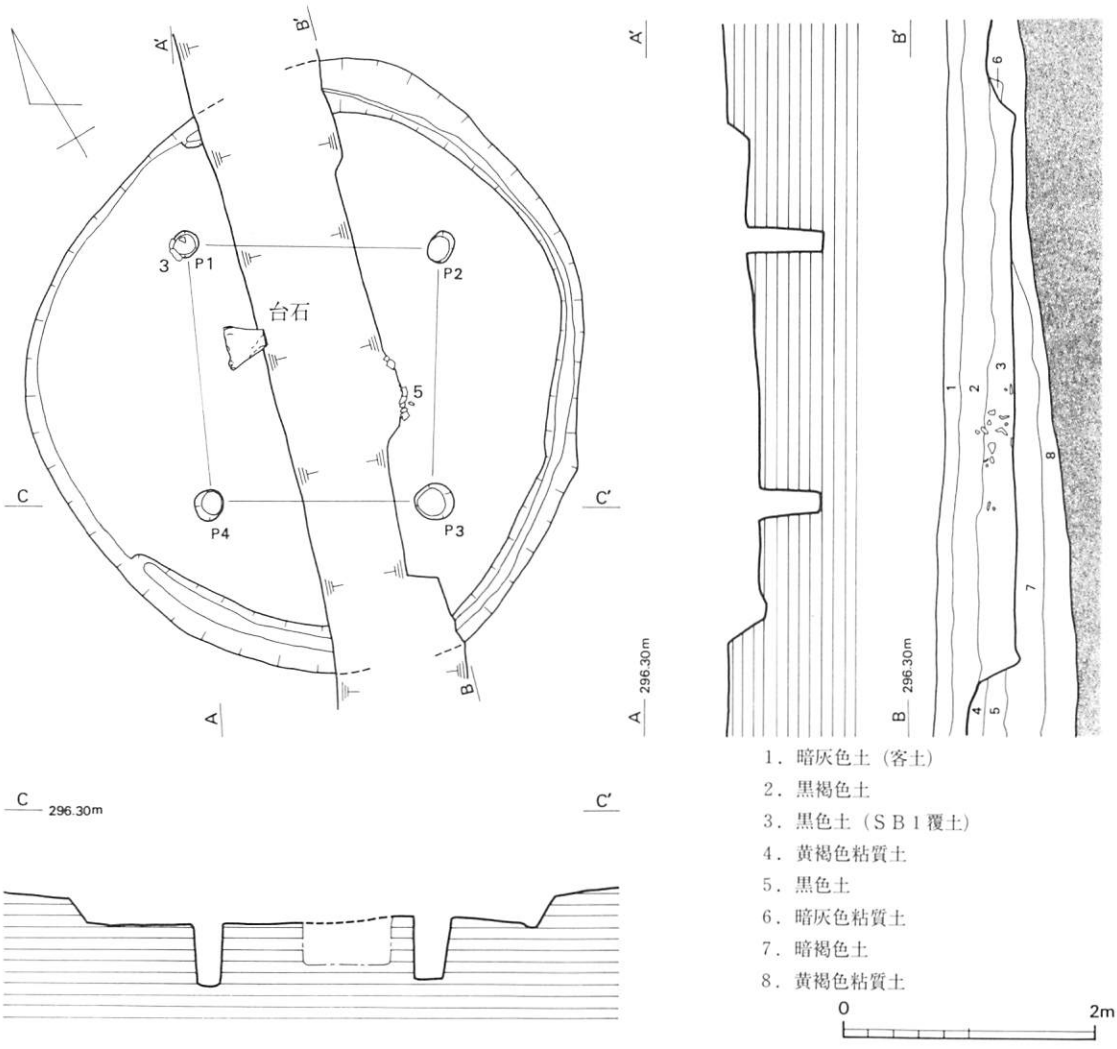
Ⅳ　遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

ＳＢ１（第４図）

ＳＢ１は調査区中央にあり，北側２ｍにＳＫ１が存在する。規模は南北約4.9ｍ，東西約4.5ｍと，南北にいくらか長い不整円形である。壁高は20㎝程度で北西部分を除いた床面の壁際には，幅５～43cm，深さ４～７cmの壁溝がめぐる。主柱穴は径20～30cm，深さ48～60cmの柱穴４個（Ｐ１～Ｐ４）を方形に配している。各柱穴間の距離は1.72ｍ～2.07ｍで，Ｐ３－Ｐ４間が他に比べてやや狭くなっている。床には厚さ１～２cmの暗黄灰色土を，ほぼ全面にわたり貼っている。

出土遺物として床面及び覆土から弥生土器甕（第６図１～５）が出土した。これらの遺物からみて本住居跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。また，床面中央付近で台石と思われる扁平な板石１点が出土した。



第４図　ＳＢ１実測図（１：60）

ＳＢ２（第５図）

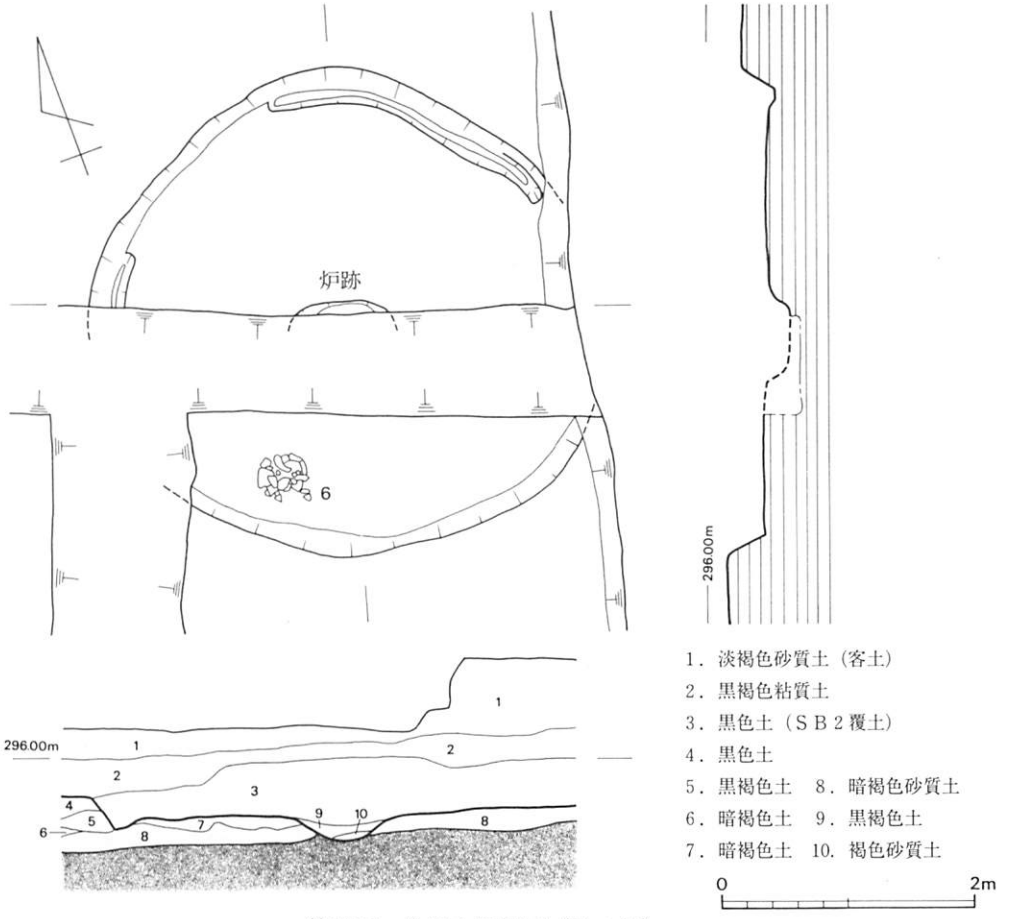
ＳＢ２は調査区南半にあり，ＳＢ３の南４ｍに位置する。東端が一部調査区外にのびており，全容が不明ではあるが，ほぼ平面形は円形で，径約４ｍと考えられる。壁高は20～40cmで，北東側及び西側の床面の壁際には幅10～28cm，深さ５～７cm程度の壁溝が部分的に認められる。主柱穴などのピットは検出していない。床面ほぼ中央には径80cm，深さ20cm程度の平面円形状の炉跡と考えられる窪みが存在する。床面のほぼ全面に黄褐色土の貼床が施されている。

出土遺物としては弥生土器甕（第６図６～８），磨石（第６図９）が出土しており，本住居跡の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

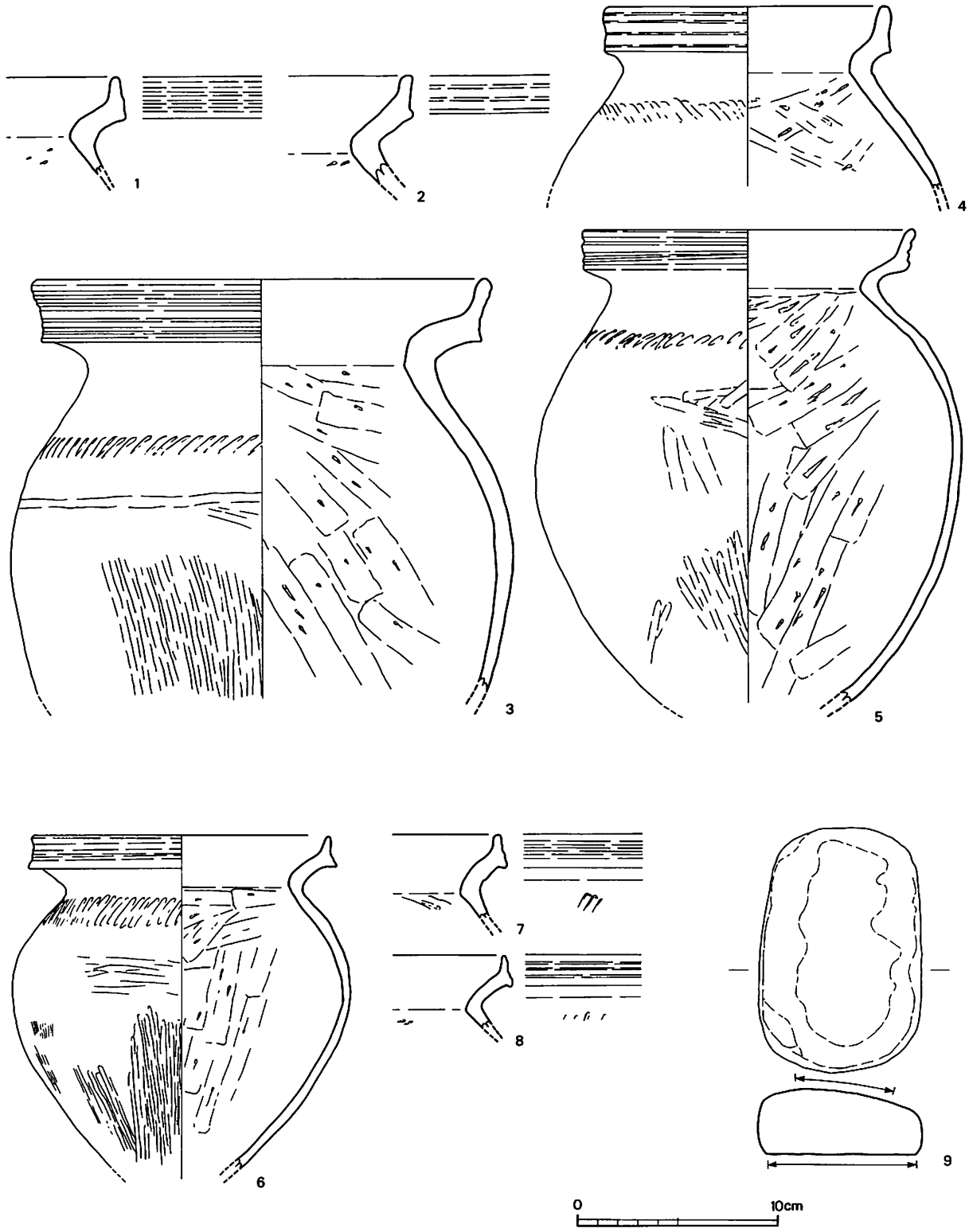
ＳＢ１・ＳＢ２出土遺物（第６図）

１～５はＳＢ１，６～９はＳＢ２にともなう遺物（弥生土器・磨石）である。３はＳＢ１の主柱穴（Ｐ１）内及び周辺で，５・６・９は各々遺構の床面直上から出土した。そのほかは住居跡覆土からの出土である。

１～８は弥生土器甕である。１・２は口縁部破片である。いずれもくの字に屈曲した頸部から直立気味に立ち上がる短い口縁で，端部は丸くおさめる。外面に２～４条の凹線文をめぐらせている。調整は口縁部内外面ともにヨコナデで，内面頸部以下はヘラケズリである。



第５図　ＳＢ２実測図（１：60）



第6図　ＳＢ１・ＳＢ２出土遺物実測図（１：３）

3は甕で，体部下半が欠けている。復元口径は22.3cm，復元体部最大径は24.1cmである。頸部で強く屈曲する口縁部の端部を開き気味に直立させ丸くおさめる。口縁部外面に6条の凹線文を施し，肩部外面にはヘラ状工具による右上がりの刺突文がめぐる。調整は口縁部内外面ヨコナデ，外面の体部上半ナデ，体部下半にヘラナデ，内面頸部以下は斜め方向主体のヘラケズリを施す。なお，外面の体部中央付近に幅7㎜程度の凹線状のごく浅い窪みがめぐっている。

4は甕の口縁部から体部上半の破片で，復元口径は13.6cmである。口縁部は短くくの字に屈曲した頸部から直立し端部は丸くおさめる。口縁部外面に4条の凹線文を施している。肩部に浅く比較的幅の広い，ヘラ状工具による左上がりの刺突文がめぐる。調整は口縁部内外面ともヨコナデで，体部内面はヘラケズリ，体部外面はナデと思われる。

5は甕で底部を欠く。口径は16.2cm，体部最大径21.1cmである。口縁部は強くくの字に屈曲して，斜め上方に開き気味に立ち上がり，端部を丸くおさめる。口縁部外面には3条の凹線文がめぐる。肩部にはヘラ状工具による右上がりの刺突文を施す。調整は口縁部内外面がヨコナデで，外面は体部が粗いヘラナデ，底部は粗いヘラミガキである。内面頸部以下は縦から斜め方向のヘラケズリを施している。

6はやや小型の甕で底部を欠く。口径は14.6cmで体部最大径は16.8cmである。くの字に屈曲する頸部からのびた口縁の端部を上下に引きだし，端面には3条の凹線文をめぐらせている。外面肩部には右上がりのヘラ状工具による刺突文をめぐらせている。調整は，口縁部内外面がヨコナデ，外面は体部上半が丁寧なヨコナデ，体部下半がヘラミガキである。内面頸部以下は縦方向のヘラケズリが主体で，頸部直下にはいくらか横方向のものがみられる。なお，頸部以下の外面には多量の煤が付着している。

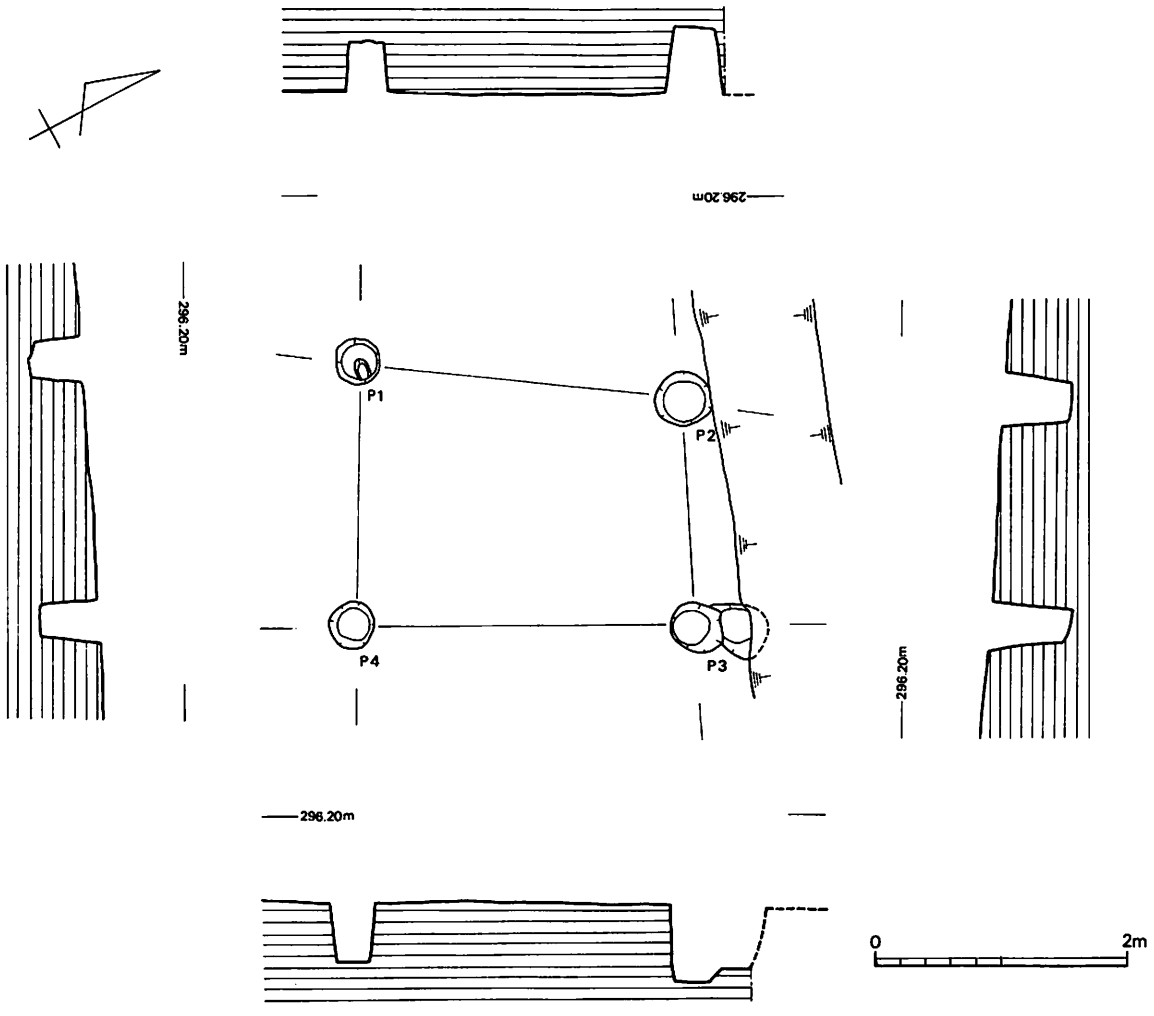
7・8は口縁部破片で，いずれも口縁端部を上下に拡張し，端面に3条の凹線文をめぐらせている。調整は口縁部内外面がヨコナデ，内面頸部以下ヘラケズリである。なお，8の口縁部外面には煤が付着している。

9はＳＢ2床面付近から出土した磨石で，長さ12.1cm，幅8.0cm，厚さ3.2cm，重さ0.614kgである。表裏2面を使用面とし，裏面はほぼ全面が平滑で，擦痕が若干確認される。石材は花崗閃緑岩である。

（2）掘立柱建物跡

ＳＢ3（第7図）

調査区中央のＳＢ1とＳＢ2の中間に位置する1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸はＮ30°Ｅで，ほぼ北東－南西方向を指す。桁行2.58～2.71m，梁行1.81～2.10mの不整長方形である。柱穴の規模は，径35～45cm，深さ38～64cmである。遺物は出土しておらず，本遺構の時期については不明である。



第7図　ＳＢ３実測図（１：60）

（３）土壙

ＳＫ１（第８図）

ＳＫ１は調査区北半に位置する隅丸長方形の土壙で，南側２ｍにはＳＢ１が存在する。トレンチにより西側の一部を削平されているが，規模は長さ1.8m，幅1.1m，深さ40cm程度と考えられる。主軸はＮ49°Ｅで，ほぼ北東－南西方向を指す。土層断面の観察によれば，第３層（黒色土）が木棺裏込土かと思われ，墓壙の可能性がある。遺物は出土していない。

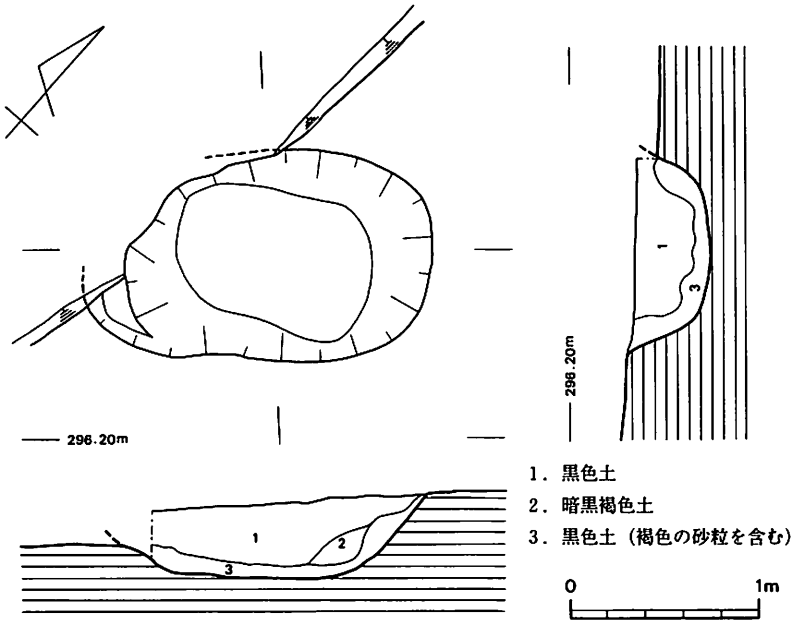
（４）調査区内出土遺物

10～33は遺構に伴わない遺物で，内訳は弥生土器22点，鉄器（鉄鏃・釘）２点である。

①弥生土器（第９図）

弥生時代前期の甕（10・11），後期の壺（12～16），甕（17～27），底部（28～31）がある。

10・11は甕の口縁部破片である。いずれも直立する頸部からくの字に外方に屈曲させて口縁部



第8図　ＳＫ１実測図（１：40）

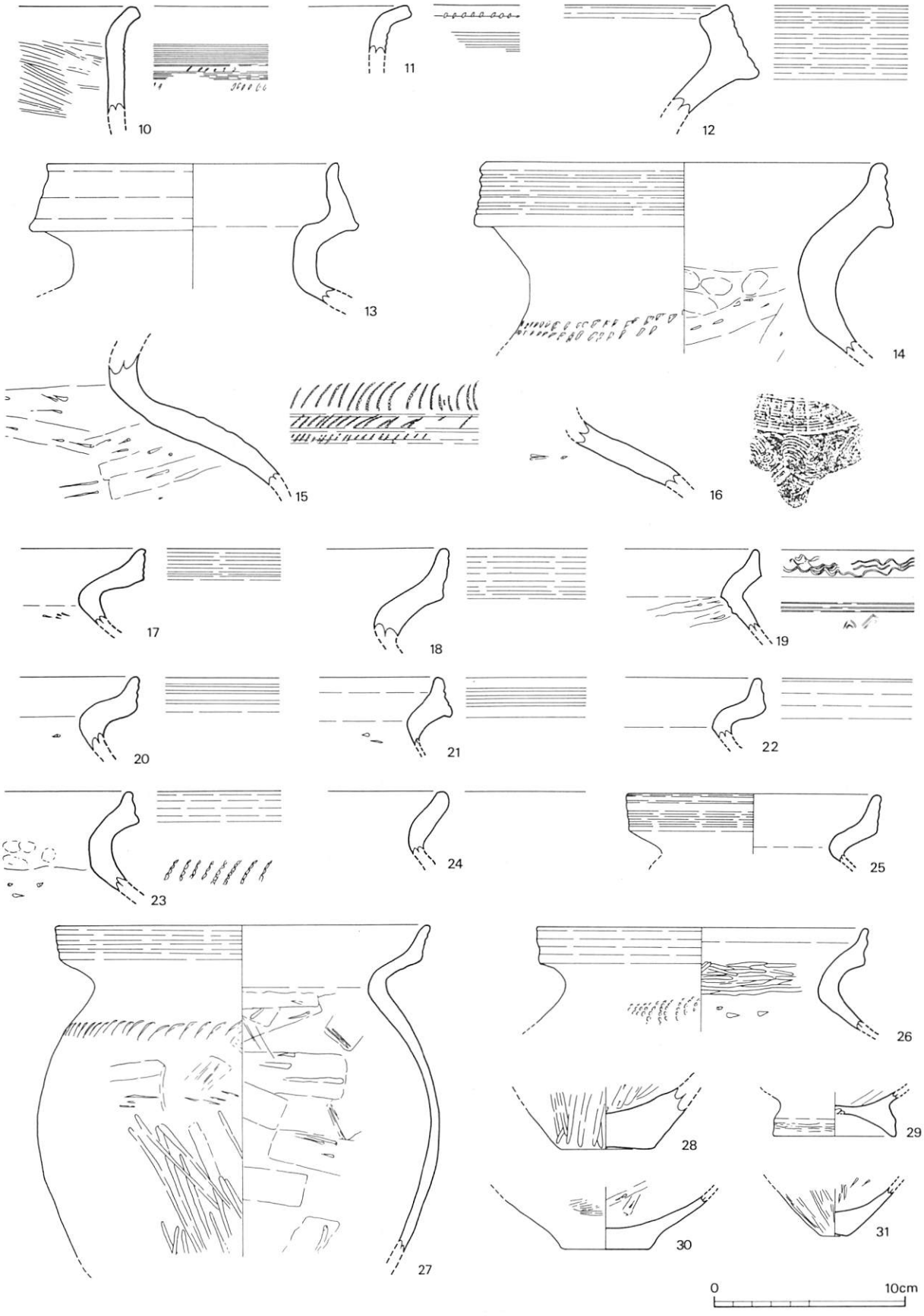
とし，端部を平坦にしている。10は口縁直下の外面に10条程度の櫛歯状工具による沈線をめぐらせ，その下部には部分的にヘラ状工具による刺突文がみられる。11は口縁端部下縁に約３㎜間隔で刻目を入れ，口縁直下の外面には４条の沈線を施す。調整は10が外面ヨコナデ，内面に粗い刷毛目がみられる。11は内外面ともヨコナデである。

12は壺の口縁部破片である。口縁部はやや内傾気味に直立する分厚いもので，端部は平坦である。口縁部外面に７条の，端面に２条の凹線文が施される。調整は内外面ともヨコナデである。

13・14は壺の口縁部から頸部破片である。13は直立する頸部から強く屈曲して短く外方にのびた擬口縁から内傾してのびる口縁端部を短く直立させて丸くおさめる。14は分厚い頸部から緩やかに外上方にのびた口縁部の端部を上下に僅かに拡張している。14は口縁部端面に５条の凹線文がめぐり，外面の頸部下半にはヘラ状工具による刺突文を２段めぐらせている。調整は13・14ともに口縁部内外面ヨコナデである。14の内面頸部以下はヘラケズリで，頸部の最もくびれた部分に指頭圧痕が認められる。

15・16は壺の肩部付近の破片である。15は３条の凹線文を施したのち，二枚貝の腹縁による３段の刺突文を施す。16は外面の上半に簾状文，その下部に櫛歯状工具による波状文を施す。調整は外面が15は頸部ヨコナデ，体部ナデ，16はナデ，内面はともに横方向を主体とするヘラケズリである。

17～24はいずれも甕の口縁部小破片である。くの字に屈曲する頸部から外上方にのびた口縁部の端部を上方ないしは上下に短く拡張するものが主で，口縁部外面には２～４条の凹線文を施している。調整は口縁部内外面ヨコナデで，内面頸部以下に横方向主体のヘラケズリを施している。19はヘラ状工具で外面頸部に３条の沈線，口縁部に３条，沈線直下に数条の波状文を施す。23は



第9図　調査区内出土遺物実測図Ⅰ（1：3）　弥生土器

外面頸部に二枚貝腹縁による刺突文が，頸部内面には指頭圧痕がみられる。24はくの字に屈曲して外上方に直線的にのびる口縁端部を丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

25・26は甕の口縁部である。25は復元口径12.9cmで，やや開き気味に直立する口縁部の外面に7条の櫛描沈線を施している。26は復元口径17.2cmで，ゆるやかに外反する頸部にほぼ直立する口縁がつくもので，口縁部外面には幅の広い2条の凹線文をめぐらせ，のちヘラ状工具によるナデを施している。頸部には部分的に二枚貝腹縁による刺突文が認められる。25・26とも調整は，口縁部内外面がヨコナデ，内面頸部以下はヘラケズリを施している。なお，26は内面口縁下部から頸部にかけてヘラミガキが認められる。

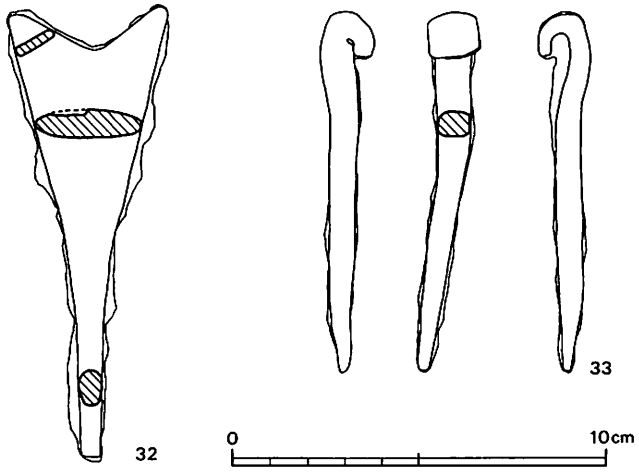
27は甕で，底部を欠いている。復元口径19.2cm，復元体部最大径21.1cmである。頸部でくの字に屈曲し，外上方に直線的にのびる口縁部の端部を丸くおさめる。口縁部外面には3条の凹線文，肩部にはヘラ状工具による右上がりの刺突文を施す。調整は，外面が口縁部に強いヨコナデ，体部上半から中央にかけての一部にヘラ状工具によるナデ，体部中央以下に粗いヘラミガキを施している。内面の調整は，口縁部が丁寧なヨコナデ，頸部以下は横方向主体のヘラケズリである。

28～31は底部片である。29は貼り付けによる上げ底，31はやや凹み底，28・30は平底である。復元底径は28が4.7cm，29が6.3cm，30が4.4cm，31が1.4cmである。調整は内面ヘラケズリ，外底面ナデで，外面は28がヘラミガキ，29がヨコナデ，30が丁寧なナデで一部にヘラナデ，31は刷毛目ののち粗いナデを行っている。29の外面には粗い4条の沈線が施されている。

②鉄器（第10図）

32は黒褐色粘質土層より出土した，雁股式の鉄鏃である。全長11.9cm，鏃身部長8.5cm，刃部幅4.2cm，重さ56.1ｇである。錆による膨張のため厚み及び断面形は不確定であるが，刃部の断面形は長方形で厚さは2mmである。

33は鉄釘である。長さ約9.4cm，断面約8mm×約6mm，重さ16.5ｇであり，断面形は方形である。頭部は端部を折り曲げた折頭形である。



第10図　調査区内出土遺物実測図Ⅱ（1：2）　鉄器

V　まとめ

出羽遺跡は，江の川支流の河岸段丘上に形成された弥生時代後期の集落である。竪穴住居跡２軒を検出し，弥生土器，磨石などが出土した。このほか，時期不明の掘立柱建物跡１棟，土壙１基を検出した。今回の調査はほ場整備に伴うもので，遺跡の一部を明らかにしたにすぎないが，ここでは竪穴住居跡及び弥生土器について若干の検討を加え，まとめとしたい。

竪穴住居跡（ＳＢ１・ＳＢ２）はいずれも径４ｍ余と小規模な円形のもので，柱構造はＳＢ１が４本柱であるのに対して，ＳＢ２では主柱穴は検出できていない。いずれも谷状地形の埋積土上につくられているためか，粘土を用いて床を貼っているのが特徴的である。

遺物の大半を占める弥生土器の多くは遺構検出面を覆う黒褐色粘質土の包含層からの出土で，竪穴住居跡（ＳＢ１・ＳＢ２）に伴うものはあまり多くない。弥生土器には弥生時代前期に含まれるもの（10・11）も若干みられるが，大半は弥生時代後期に属する。土器片の多くは甕の口縁部片であり，口縁の形態や施文・調整の特徴から，口縁端部を上下に拡張して内傾させたもの（Ａ類：６～８・21）と，上方に拡張させた口縁端部を直立ないしはいくらか外傾させるもの（Ｂ類：１～５・17～20・22・23・25～27）とに分けられる。いずれもその外面に凹線文を施している。６によれば，Ａ類の甕は最大径が体部上半にある。類例としては，山県郡大朝町・岡の段Ｃ地点遺跡[1]ＳＢ２・４，島根県江津市波来浜（ならはま）遺跡[2]Ｂ－１号墳出土の土器がある。石見Ｖ－１様式に該当[3]し，ほぼ弥生時代後期前葉に相当する。Ｂ類は３・５・27から推察すると最大径が体部のほぼ中央にある。類例として，岡の段Ｃ地点遺跡ＳＢ13・16，千代田町・焼け遺跡[4]ＳＤ４出土の土器がある。石見Ｖ－２様式に該当し，弥生時代後期中葉にほぼ相当する。

以上のことから，Ａ類の土器がＢ類に比べて時期的に先行すると考えられる。ＳＢ１床面出土土器（３・５）はＢ類に，ＳＢ２床面出土土器（６）はＡ類に含まれることから考えて，ＳＢ１とＳＢ２は同時期につくられたものではなく，ＳＢ２がやや古いと思われる。なお，包含層出土土器の大半はＢ類で，ＳＢ１と同時期のものである。

本遺跡では弥生時代後期前葉から中葉にかけての集落跡を確認した。千代田町における弥生時代の集落跡の調査例は京野遺跡[5]・焼け遺跡など少なく,様相はあまり明らかではない。今回の調査は今後の当地域の弥生時代の解明に貴重な資料を提供したと考えられる。

註

（１）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　「岡の段Ｃ地点遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅳ）　1994年

（２）　江津市　『波来浜遺跡発掘調査報告書－第１・２次緊急調査概報－』　1973年

（３）　正岡睦夫・松本岩雄　『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』　木耳社　1992年

（４）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　「焼け遺跡」『本郷遺跡　焼け遺跡』　1990年

（５）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが1994年度に調査を実施した。

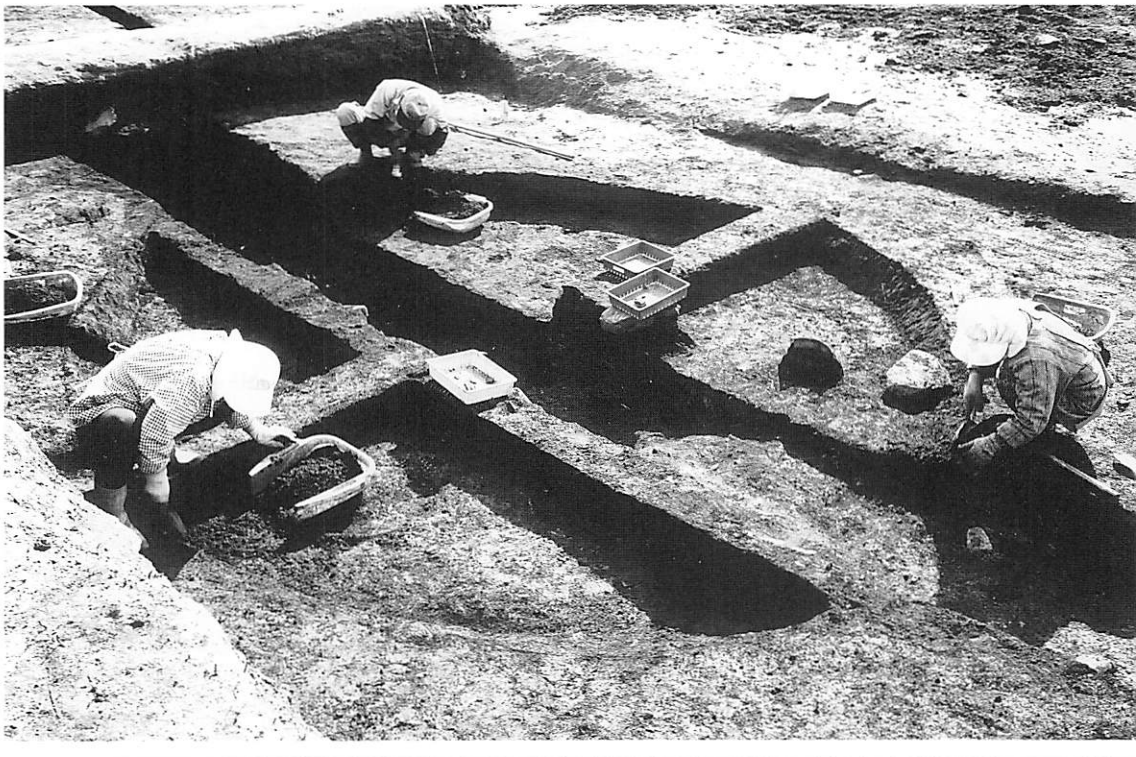
a．遠景（北から）

b．調査前近景（南から）

c．調査後全景（南から）

a．調査後全景（北から）

b．ＳＢ１調査風景
（北東から）



c．同上完掘状況
（西から）

a．ＳＢ１土器出土状況
（北から）

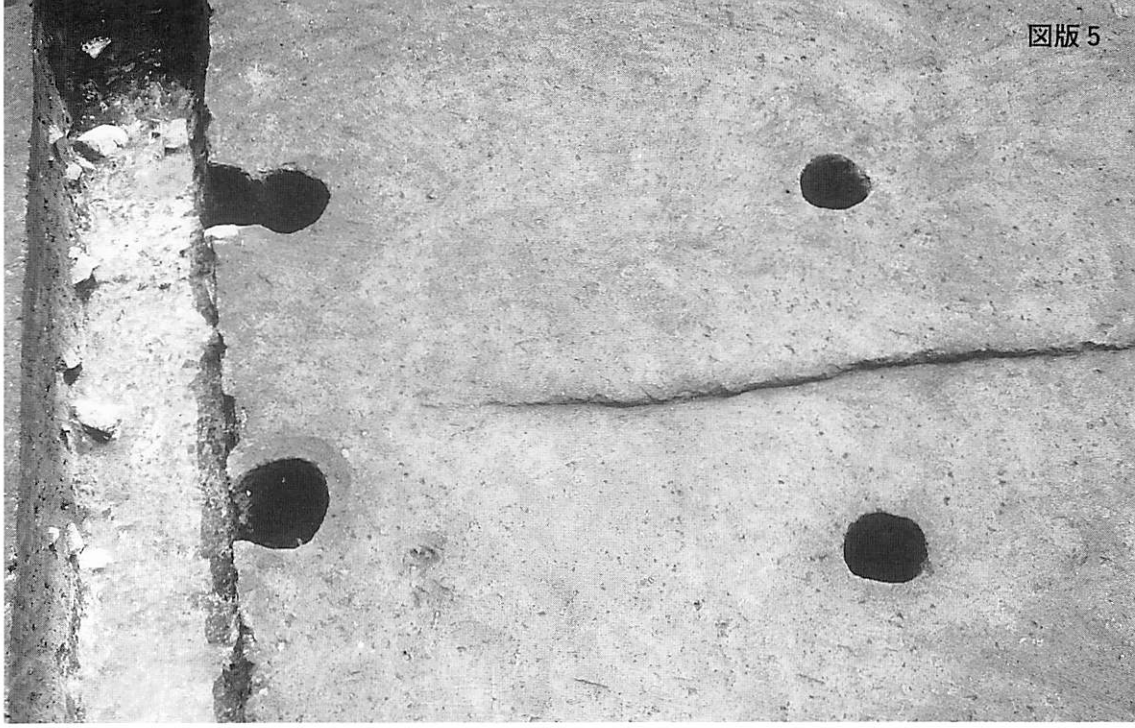
b．同上（南東から）

c．ＳＢ１土層断面
（西から）

a．ＳＢ２完掘状況
（北西から）

b．同上土器出土状況
（北から）

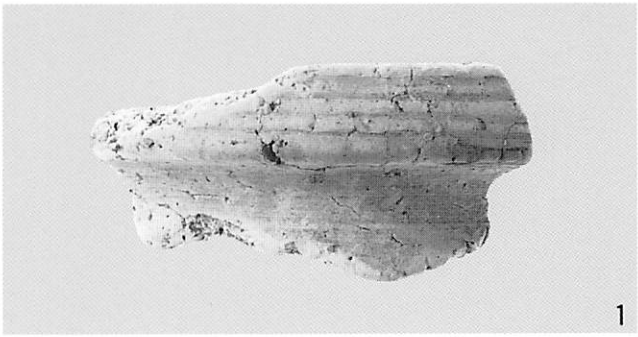
c．同上土層断面
（南から）

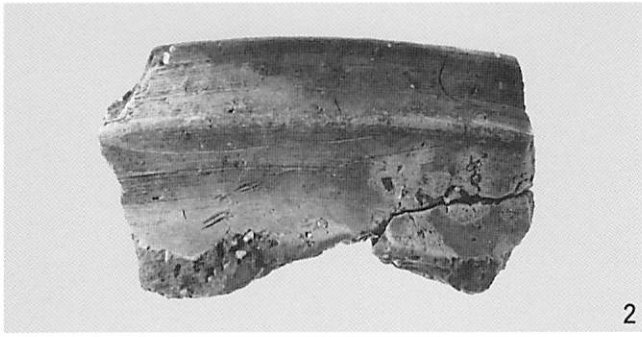


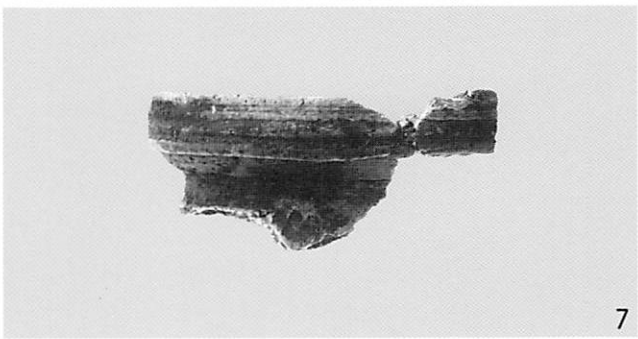
a．ＳＢ３完掘状況
（西から）

b．ＳＫ１完掘状況
（北西から）

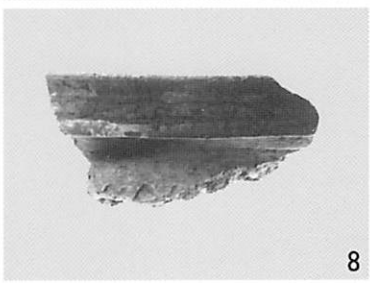
c．同上土層断面
（東から）

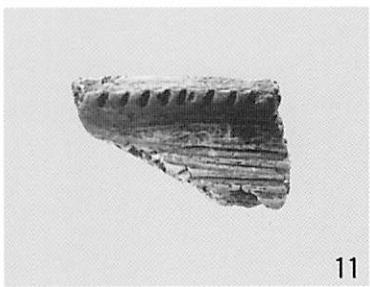

1

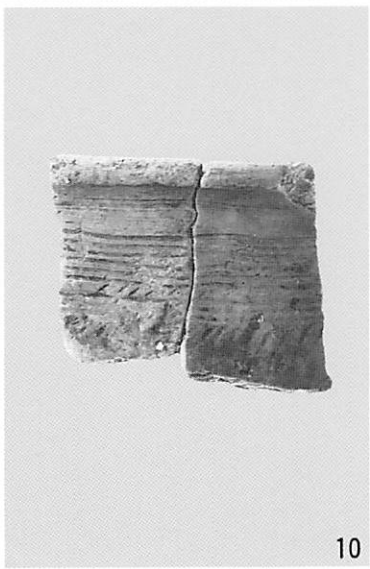

2


7

4

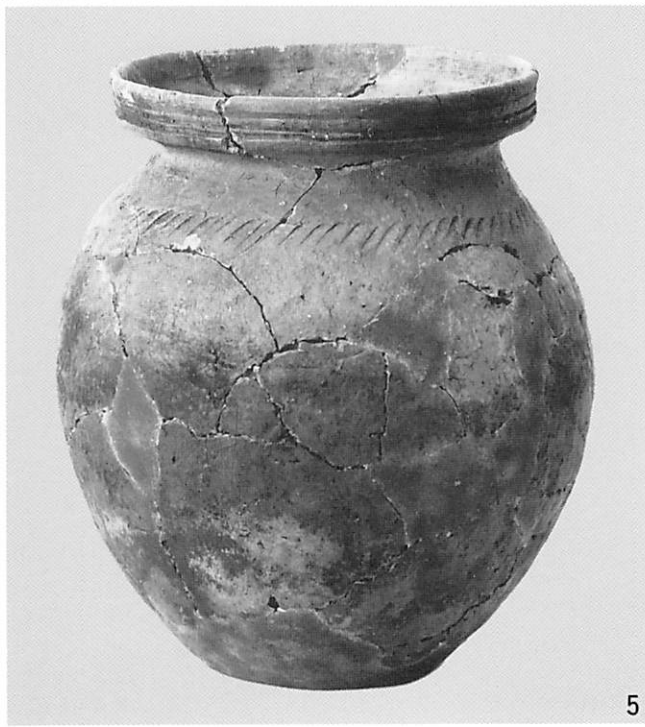

8


11


10

6

3


5

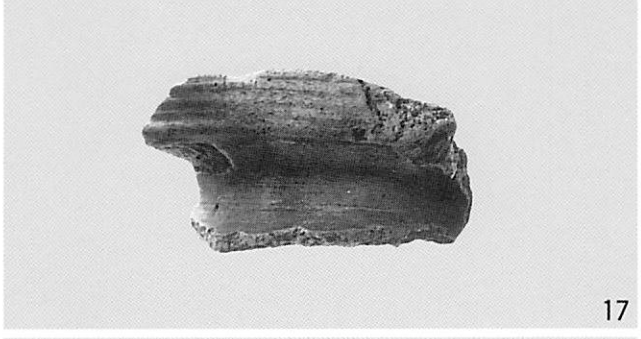
出 土 遺 物　1

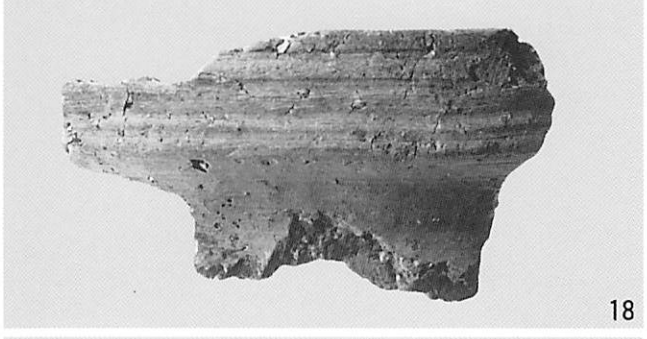
12

13

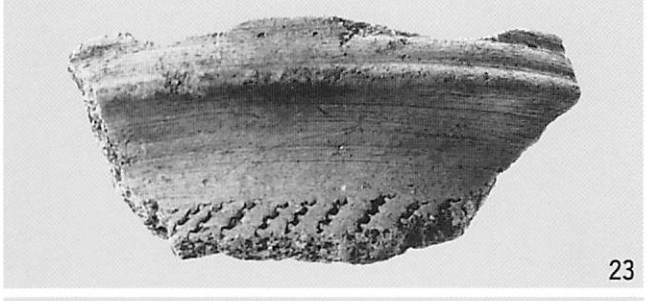
16

14

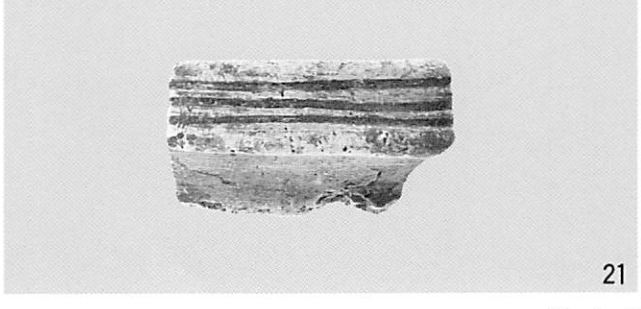

17


18

19

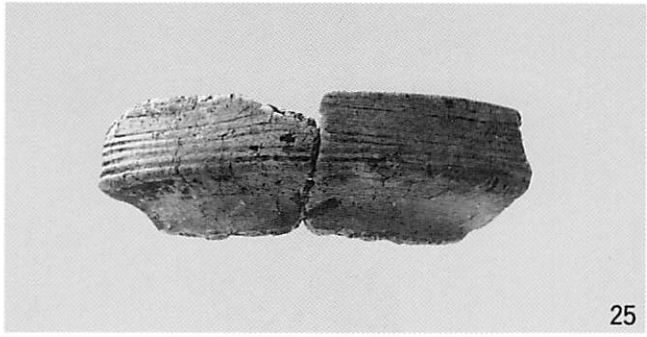

23

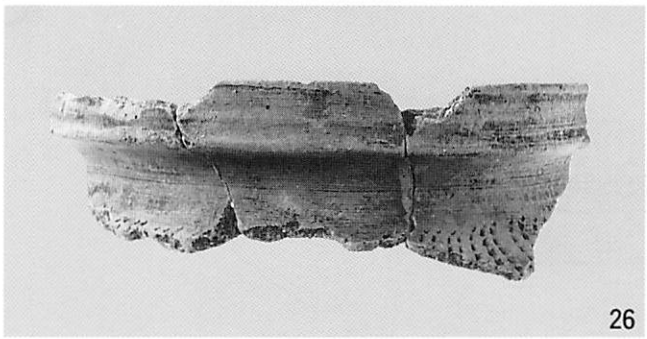
20


21

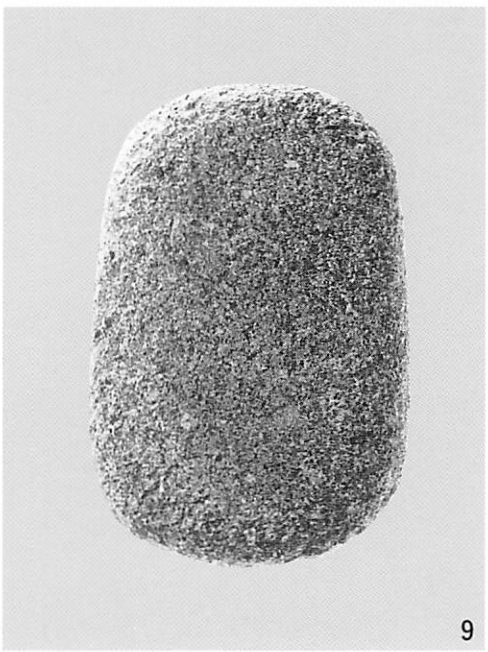
15

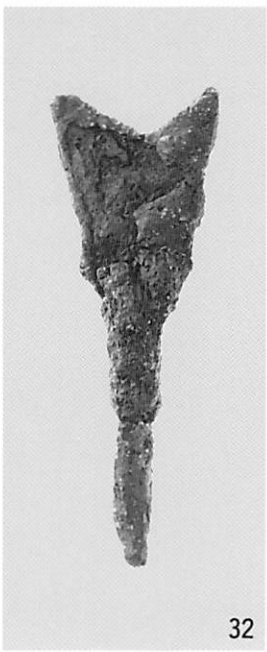
出 土 遺 物　2

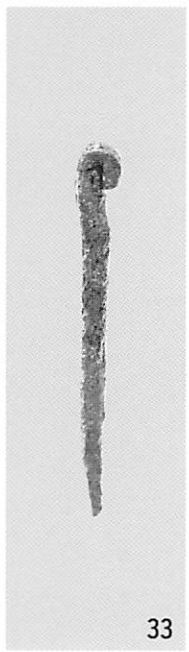

25


26

27


9


32


33

出 土 遺 物　3

報告書抄録

ふりがな	でわいせき
書名	出羽遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第155集
編著者名	大島　裕
編集機関	財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733　広島県広島市西区観音新町四丁目8-49　TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
でわいせき 出羽遺跡	ひろしまけんやまがたぐん 広島県山県郡 ちよだちょうみなみがた 千代田町南方	34366		34° 39′ 17″	132° 34′ 39″	19960408 ～ 19960510	430m²	県営ほ場整備事業に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出羽遺跡	集落	弥生時代後期	竪穴住居跡2軒 掘立柱建物跡1棟 土壙　1基	弥生土器 磨石 鉄鏃 鉄釘	

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第155集

出　羽　遺　跡

発行日　1997（平成9）年3月31日

編集・発行　財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082)295-5751

印刷所　㈱エル・コーポレーション